物語的ではない自我の在り方について

福田敦史

1．はじめに

現在、学問研究分野であれ、あるいは、実践の場面であれ、さまざまな場面において「物語論的方法narrative method」や「物語論的アプローチnarrative approach」などと呼ばれる研究方法が行われている。この物語論的な方法は、しばしば自我の在り方の考察において用いられており、そこでは、自我は、自らの存在について物語ることで自らを構成していく、といった観点がとられることが多い。

しかし、自我を物語的自我として考察する態度には問題はないのであろうか。自我とは果たしてほんとうに物語的なものなのであろうか。自我は、例えば、物語的ではない在り方はできないのであろうか。さらに、自我は物語的に存在すべきであったり、物語的であることを目指さなければならないのであろうか。本論文では、こうした物語的自我という考えに関して批判的に取り組み、自我の在り方として、物語的な在り方につきるものではないことを示し、加えて、物語的に存在すべき必要があるわけでもないことを示したい。次節では、物語的自我についての概略を示し、続く3節と4節でこの自我概念に対する批判を紹介し検討する[1]。

2．物語的自我というものについて

G.ストローソンによれば、物語Narrativeという観点から自我について語る傾向は「哲学を含め、心理学、神学、人類学、社会学、政治理論、文学研究、宗教学、心理療法、医学においても流行を見せている[2]」とされ

1　この論文は、2011年10月1日（土）に明治大学駿河台キャンパスで開催された「心の科学の基礎論」研究会、第63回研究会における発表「自我であることのミニマルな条件を巡って」の主として前半部分をもとにして大幅に加筆訂正を施したものである。

2　Strawson (2004), p.189.

る。このように既にしてさまざまな領域で論じられているのにも関わらず(あるいはさまざまな領域で論じられているからこそであるのかもしれないが)、実際のところ、物語的自我Narrative Selfという考えがいったい何を意味し、含意しているのか、物語論者のあいだにあってさえ、さほど合意がとれている状況とは言えない[3]。

とはいえ、最大公約数的に、概ね次のようなことは言えるであろう。それは、自我というものが、自分自身の記憶を語ることや、他者からの語りなどを通して、物語として自らの存在を紡いでいくものであるとされ、人間は、自らについて物語ることで自我として構成されていくものである、という捉え方がなされているということである。

本論文では、哲学における物語的自我についての議論を中心的に取り上げることになるが、仮に社会科学における典型的な主張を挙げるとするならば、例えば次のようなものだろうか。

> 人間に独特の特性に思われるものは、自分たち自身を時間的な存在——歴史を伴った存在として意識することである。個人としてであっても、様々な集団の成員としてであっても、私たちの現在の存在は、過去の記憶と未来への予期とで強く形作られている。物語論者(Narrativist)たちは、私たちの人生のこの特徴を意味あるものにしようとするときに用いる主要な装置がプロットであると主張する。[……]物語として筋立てる(emplotment)ことを通して、私たちは、時間性との調和を組織し、統合するのであり、また、追求もするのである。この観点では、物語としての筋立ては、私たちの時間体験を人間化し、その一くだり(passage)を私たちにとって意義あるものにするのである。物語としての筋立ては、出来事に秩序と方向性を与えるのであり、さもなければ、これらの出来事は、でたらめにあるいは個々ばらばらなものとして(as random or isolated)認識されてしまうようなものなのである[4]。

先のストローソンの指摘のとおり、現在、さまざまな領域で、物語性narrativityや物語といった用語、そして、自分自身を物語的に捉える物語

3 Schechtman (2011), p.394.
4 Hinchman and Hinchman (1997), p.1.

的自我というものが取り上げられているが、哲学の分野での代表的な物語論者としては、例えば、A.マッキンタイア[5]、Ch.テイラー[6]、P.リクール[7]、M.シェクトマン[8]といった名前を挙げることができるだろう。本節では、これらの論者の中から、物語論者の嚆矢とも呼べるマッキンタイアにおける物語性についての議論を、本論文との関係という観点から簡単にみてみることにする[9]。

マッキンタイアは、行為者である人間が、自身の行為の有意味性を見出すためには、自身の行為をただ個々バラバラに捉えるだけでは十分ではないとする。マッキンタイアの例を用いれば[10]、「卵を6個用意する。次にそれを割ってボウルに入れる。小麦粉、塩、砂糖を加え、などなど」といった場合、「卵を6個用意する」や「卵を割ってボウルに入れる」といった行為は、それぞれ単独では意味をなさず、これら行為よりも大きな文脈におかれることで、初めて意味をなす。この場合であれば、例えば「ケーキを作る」とか「お好み焼きを作る」といったものが、個々の行為よりも大

5　MacIntyre (1981).
6　Taylor (1989).
7　Ricœur (1983,1984,1985).
8　Schechtman(1996; 2007; 2011).
9　長めの註になるが、本文に関していくつかの点を加えておく。「物語的な自己性」という考えは、マッキンタイアの影響により、とりわけ倫理学や政治哲学の文脈において論じられるようになるが、マッキンタイアが『美徳なき時代』で取り上げたことで、キルケゴール研究でも熱心に論じられている。例えばDavenport and Rudd (2001)など。(「キルケゴールが『あれかこれか』で倫理的な生き方と美的な生き方とを対照的に論じたところによると、美的な生とは、人間の生が一連のバラバラの現在の瞬間に解消されるような生である。そこでは人間の生の統一性は視界から消えてしまう。それに対して倫理的な生においては、責務を抱き義理を引き受けるようになった過去の挿話から生じる、未来への言質と責任が、人間の生を統一体へと仕上げるような仕方で現在を過去と未来とに結びつけている。キルケゴールが言及する統一性とは件の物語的統一性であり、それが諸徳の生の中でもつ中心的位置については直前の章で確認した（MacIntyre(1981), pp.241-242.)

また、本文では、物語をパーソンや自我にとっての本質的な特徴と捉える論者達を念頭に紹介しているが、例えばSchechtman (2011)によれば、このような論者の他に、「自己－物語性」というものを、自我にとっての一側面を明らかにするための、あくまで一つの道具立てとみなして（したがって、必ずしも自我の本質的特徴とみなすのではなく）自我について考察する論者などもいる。例えばHutto (2008)などが挙げられる。しかしながら、筆者は、物語性を自我の本質的な特徴として考察する論者と、一道具立てとみなす論者とが、シェクトマンが主張するほど明瞭に区別できるか否かについては懐疑的である。

最後に、D.C.デネットについても一言指摘しておく。Dennett(1991; 1992)も、自我を物語性との関連で取り扱う論者であるが、デネットは自我の実体性を否定し、自我などというものは単に有用なフィクションであることを指摘するために物語性を持ち出すのであって(the self as a center of narrative gravity)、本文や本註の他の論者達とは大きく異なるので、蛇足ながら注意が必要である。
10　MacIntyre (1981), p.209.

きな文脈であると言えるであろう。

重要なのは、文脈によって、個々の行為の意味合いというものが変わりうることである。例えば、「ケーキを作る」という文脈のもとで「小麦粉、塩、砂糖を加える」という行為が捉えられるのと、「お好み焼きを作る」という文脈のもとで「小麦粉、塩、砂糖を加える」という行為が捉えられるのとでは、おそらく多くの人にとって意味合いが異なるであろう（ケーキを作る際に砂糖を加えるのは珍しいことではないだろうが、お好み焼きを作る際に砂糖を加えるのは、おそらく珍しいことであろう）。

文脈のもとにおいて、行為の意味合いが初めて定まるのであるから、その行為の道徳的な含意が定まってくるのも、ある文脈のもとでということになる。ある行為の選択をする際、あるいは、その行為の道徳性や有意味性を認識するためにも、自身の行為をただ個々バラバラに捉えるのではなく、全体的で統一的な物語のなかに位置づけることができるのでなければならないのである（「『私は何を行うべきか』との問いに答えられるのは、『どんな物語、あるいは諸物語の中から私は自分の役を見つけるのか』という先立つ問いに答えを出せる場合だけである[11]」）。

そして、マッキンタイアによれば、自我が、こうした全体的で統一的な物語を持ち、その物語の主体であることができる、ということが、その自我が、道徳責任を引き受けることができ、他者に対しても道徳的な責任を求めることができる存在者である、ということなのである[12]。

> さてここで、人間の行為・同一性の本性へのこの探求の出発点となった問いに戻ることができる。その問いとは、「個々の人生の統一性は何に存するか」であった。答えは、「その統一性は単一の人生において具体化された物語がもつ統一性である」となる。「私にとっての善とは何か」を問うことは、私がその統一性を生き抜き、完成させるには、どうするのが最善か、を問うことである。「人間にとっての善とは何か」を問うことは、今の問いへの答えすべてが共通にもつべきものを

11 MacIntyre (1981), p.216.

12 「誕生から死までを貫くある物語の主体であるということは、先に述べたように、語られうる人生を構成する諸行為、諸経験の申し開きができるaccountableということである。」MacIntyre (1981), p.217.「物語的な自己性についての他の側面はこれと対応する点である。すなわち、私は単に申し開きのできる者というだけではなく、常に他者にも申し開きを求めうる者、他者にその問いをかける者でもあるという点である。」MacIntyre (1981), p.218.

問うことである。しかし、ここで強調しておく大事な点は、道徳生活にその統一性を与えるのは、言葉においてだけでなく行いにおいても、これら二つの問いを体系的に問いかつ答えようと試みることだ、という点である。人間の生の統一性は、物語的な探求の統一性である[13]。

人がこの世界のなかで主体として存在し「申し開き可能性accountability(説明責任)」を有し、道徳的に行為することができるためには、自身とその行為を包み込み、文脈の内に置き入れるような物語が必要である。この物語は、断片的で細切れのものであっては、その任に堪えることはできず、その自我の生の全体を包み込み、体系的で統一的に、その生を語ることができるような物語でなければならないのである。

3. 物語による経験・行為の意味づけについての批判

マッキンタイアを例にして、自我についての物語論的な取り扱いについて見てみたが、本節と次節では、このような物語論に対する批判をみてみよう。まず、こうした物語論に抗する論者として、おそらく最も著名な論者の一人にストローソンがいる。

ストローソンは、物語論者がたてている主張として、「心理的物語性テーゼpsychological Narrativity thesis」というものと「倫理的物語性テーゼethical Narrativity thesis」という二つのテーゼを指摘する[14]。

「心理的物語性テーゼ」とは、経験的・記述的な主張であり、「人間は、典型的に、自分の人生を物語や話のように、あるいは少なくとも話の集まりのようなものとして見たり、生きたり、経験するものである」というものである。そして、もう一方の「倫理的物語性テーゼ」というものは、いわば規範的な力を有したもので「自らの人生を豊かな物語という外見のもとで向き合う態度は、よく生きることにとって、すなわち、真なる、あるいは完全な人格性にとって本質的なものである」といった考えのことである[15]。例えば、前節でのマッキンタイアについてであれば、マッキンタイ

13 MacIntyre (1981), pp.218-219.
14 Strawson (2004).
15 Strawson (2004), p.189

アは、人は物語的に存在しているのであると主張することで、心理的物語性テーゼをとり、同時に、人は善く生きるためには、物語的でなければならず、自身が物語的であることを十分認識しなければならない、と考えることで、倫理的物語性テーゼもとっていることになる。

ストローソンの見立てによれば、最近の学問傾向においては、この両テーゼのどちらも真であるとみなされているわけだが、ところが、それは悲しむべき事態であり、実際のところは、心理的物語性テーゼは偽であり、倫理的物語性テーゼは単に偽であるだけでなく、有害でもあると強く主張される。

ストローソンは、自らの自我性を物語のように経験していくような人たちが存在していることの可能性を否定するわけではない。しかし、全ての自我が、そのような統一的な物語のうちで経験をし行為を意味づけているというわけではない、と主張するのである。

ストローソンによれば、物語論者は「もし自分にとって正しければ、他の人にとっても正しいに違いない」と考える過ちを犯しているのであるとされ、次のように主張される。

> 人間にとって、時間における自らの存在を経験するのにただ一つのよい道がある、と考えるのは、端的に真ではない。極めて非－物語的な人々というのはいるし、非－物語的なよい生き方というのも様々ある。私は二つ目の見解[心理的物語性テーゼを偽とみなし倫理的物語性テーゼを真とみなす見解]と三つ目の見解[心理的物語性テーゼも倫理的物語性テーゼも真とみなす見解]は、人間の自己理解を妨げ、思考の重要な道を閉ざしてしまい、私たちの倫理的な可能性の把握を貧しいものにさせ、必要もないのに、不当に彼らのモデルにあてはまらない人たちを悩ませるものであり、潜在的には、精神病理の文脈においては破壊的なものである[16]。

ストローソンは、非－物語的な人々の非－物語的な生き方を示すために、Diachronicな人々と、Episodicな人々という区別を提示する。

Diachronicな人々の基本的な自己経験とは、「自我として考えられた自分を、かつて（さらなる）過去にあり、そしてやがて（さらなる）未

16 Strawson (2004), p.190

来にいるであるようなものとして[as something that was there in the (further) past and will be there in the (further) future]、自然に、把握する」ものであり、反対に、Episodicな人々の自己経験は、「自我として考えられた自分を、かつては（さらなる）過去にあり、そしてやがて（さらなる）未来にいるであるようなものとしては、把握しない」ものである[17]。Episodicな人、Episodicな態度を持つ人は、自らの時間的な持続性というものに興味・関心を持たないものなのである。

物語論者、つまり、自我の構成において、物語というものが、その中心的な役割をしていると考える物語論者は、先にも指摘したように広範囲の分野に渡って存在しているのだが、彼らに共通していることとしてひとつ指摘できることは、自我というものが過去から現在まで時間的に延長しているということ、物語のもとで統一され統合されるのは、時間的に持続している同一の自我である（通時的に同一の自我）、という自我像が強調される点である[18]。例えば、シェクトマンの言葉を見てみよう。

> 諸個体[感覚を有する生物]は、いろいろな経験を自分たち自身のものとしながら、過去においては経験をし、未来に向かっては経験し続けるであろう、持続する主体として自分たちを考えるようになることで、自分たち自身のことをパーソン（persons）として構成するのである[19]。

しかし、このようなDiachronicで物語的な人ばかりではないとして、ストローソンはEpisodicな人の例として、自分自身のことをあげ、次のように述べている。

> Episodicな生というものについてもう少し述べておこう。そして、私は自分がかなりEpisodicであると思うので、自分自身のことを例に用いようと思う。私は、他の人間(human being)と同様、過去を持っているし、私が過去を持っているということも申し分なく十分に知っ

17 Strawson (2004), p.190

18 なお、ストローソンは、Diachronicであることと、Narrativistであることに、密接な関係をみるが、同一視しているわけではない。Narrativistであるためには、通時的に同一な自己を一貫した物語に編み込む形式が見いだされなければならない。

19 Schechtman(1996), p.94.

ている。私は過去についての事実的知識も相当量持っているし、私の過去の経験について、哲学者が言うところの「内側からfrom the inside」想い出すこともできる。それにもかかわらず、私は、ある形式を有した物語として自分の生を感じることは全くない。全くといってない。私は、私の過去についての大きくて特別な興味も持たない。また、私は自分の未来についての大きな関心も持たない[20]。

物語的自我が、物語を通して、通時的に同一のものとして捉えられ、過去から未来まで時間的に延長し、かつ、時間的な関心を抱くとみなされているのに対して、ストローソンがここで示している自我は、その時その時の経験の主体である限りの自我であり、時間的な延長は極度に短い場合もありうるものである[21]。

ストローソンは（そして哲学における多くの伝統的な立場としても）、過去から現在を経て未来へと連続的に存在している全体的な存在者としての「人間human being」と、（その時その時の）経験の主体としての「自我self」とを区別する。そして、その上で、このような経験の主体としての自我は、自分自身が人間としては、過去を有し、未来へと存在して行くであろう事を十分に理解しているその上で、自我として、その過去や未来への関心を持たない存在者である、ということが十分可能であり、事実、そのような傾向の存在者がいる、ということを主張しているわけである[22]。

さらに、このような非－物語的な自我non-narrative selfが事実存在しているにも関わらず、物語論者のように、全ての自我が物語的であらねばならないという規範的な主張をすることは、自我である人間存在の道徳の可能性を不当に狭めるものであり、物語的な傾向を持たない人々を苦しめ悩

20 Strawson (2004), p.194

21 ストローソンが提示するこのような自我は、SESMET(Subject of Experience that are Single MEntal Things)と呼ばれたり（Strawson (1999b)など）、ミニマルセルフMinimal Selfと呼ばれたりしてきている。ミニマルセルフとは、経験の主体としての最小限の条件を兼ね備えた自我のことである。

22 Episodicであるとみなす著作家として、Michel de Montaigne, the Earl of Shaftesbury, Stendhal, Hazlitt, Ford Madox Ford, Virginia Woolf, Borges, Fernando Pessoa, Iris Murdoch, Freddie Ayer, Goronwy rees, Bob Dylanの名をストローソンは挙げている。Strawson (2004), n.7.この註はStrawson (2008)では書き換えられている。

ませることにもつながりかねないということなのである[23]。

自我がある経験をする時に、その経験は、自身の人間としての生を、全体的にそして統一的に語れるような物語のなかで初めて、意味を持たされ、経験として可能になる、などということではない。その都度その都度、経験が経験として現われる時、その経験の主体として常に自我が自我として存在しているのであり、それですでにして自我として十分に存在しているとみなせる。これが、物語的自我に対して、ストローソンが擁護したい自我のあり方であると言えるだろう。

4．社会性・身体性という文脈についての批判

次に、自我のあり方に関する社会的文脈ということについて指摘しておこう。物語論者は、しばしば自我の社会性というもの、つまり、自我が社会的文脈に埋め込まれている、という点を強調することがある。これは、物語論者が自己の物語的な構成について取り上げる際、自己自身が自らについて語る物語だけではなく、他者たちが自らのことについて語る話も用いられて物語が構成される、という意味でもあるし、また、自己という物語が、自身と社会との関係という物語を用いて作られるということ、すなわち、自己というものが社会的に構成される、という意味でもある。

けれども、自我概念の検討において、このような社会的文脈を持ち出すことに否定的、あるいは消極的な論者達もいる。前節で取り上げたストローソンはもちろんだが、他にも、例えば、D.ザハヴィなどは、ストローソンほどには、必ずしも物語的自我というものについて否定的な態度をとる論者ではないが、それでも、自我の社会性という観点を強調しすぎる傾向には否定的である。

経験の主体としての最低限の条件を備えた自我としてのMinimal Selfの語を用いて、その理由としてザハヴィが述べるのは、

23　精神医療などの現場で、ナラティヴ・セラピーnarrative therapyやナラティヴ・ベイスト・メディスンnarrative based medicine(NBM)というものが行われている。その活動の報告によれば、さまざまな好影響や好展開が見られ、そのことを否定するものではない。ただ、そこにもし「人は物語的な自我であらねばならない」という強い規範性が働くとしたならば、非 - 物語的な自我である人々にとって決して好ましいことではないであろう、ということである。

> たとえ、もしかしたらMinimal Selfが最初から社会的な相互作用に巻き込まれているのだとしても、そして、たとえ、Minimal Selfが生きる経験というものが事実として（de facto)、社会的文脈のうちに生じているのだとしても、このような社会的相互作用が欠けている場合には、何故Minimal Selfではありつづけることができないのか、筋の通った理由を見いだすことができない[24]。

というものである。

ザハヴィは、経験の主体である自我というものにとって、重要で欠くことのできない特徴として、一人称的な「私にとってfor-me-ness」という性質、あるいは、「私のものmineness」という性質を指摘する。そして、こうした経験の主体性の特徴は、社会的文脈という観点、あるいは自己の物語性という観点からの考察からは抜け落ちてしまうと考えているのである。

ザハヴィが述べているのは次のようなものである。

> 私たちの経験的生の根本的な構造と特徴とを無視した自我についての考察は、出発点ではない。そして、経験的次元の正しい記述と考察は、必然的に、一人称的な観点と、それから導かれる自己指示の始原的なかたちとを正当に取り扱わなければならない。私が知っている物語論は――そもそも問題に気づいているとしてだが――、いかにして、一人称的な所与性givennessが物語によってもたらされるのか説明できそうにもない。しかし、このような不首尾は実際驚くことではなく、というのも、その反対のことが起きているのだから。自分自身の経験や行為について話を語ることができるためにも、ひとは既に一人称的観点を有しているのでなければならない[25]。

というもので、非常に手厳しいものであると言えよう。

こうした社会性の重視という傾向と関連したものとしては、物語論者を始め、自我や自己意識についての最近の考察において、多くの人が、自我の身体性embodiednessや行為者性agencyというものを取り上げる傾向が

24 Zahavi (2010b), p.19..
25 Zahavi (2007), p.200.

ある。しかしながら、やはりストローソンは、身体性や行為者性というものを（そして、さらには人格性というものも）経験の主体としての自我であることに含めることに否定的である。

彼の主張は、経験の主体としての自我であるために、自分が身体を有していることに気づいていることや、あるいは、自分の身体を自分に帰属することができるこど、あるいは、自分が意図的な行為をすることができる存在者とみなすことなど、これらのことは必要ではない、というものである。もちろんのこと、ストローソンとしても、自我が、事実として、身体を持ち、行為者でもある可能性までも否定するわけではない。というのも、自我は人間でもあり、その人間は「もちろん」身体を有しているわけであるからである。しかし、あくまで経験をする自我としてみた場合に、身体性や行為者性が自我であることにとっての必要な条件ではないと考えているのである[26]。

5．まとめ

自我を物語的に捉える哲学的立場によれば、自我というものが、総体的で統一的な物語のもと、自らの経験や行為を自らの内に帰属し構成していく存在者として捉えられる。

しかし、人間という観点からではなく、経験の主体としての自我という観点から見た場合、必ずしも、物語的な在り方のみが自我の在り方であるとは言えない。非 - 物語的な自我というものは事実存在しており、しかも、倫理的・道徳的になんら欠けるところなく経験し生活を送っているのである。

たとえ、物語論的なアプローチによってさまざまな収穫があることが事実であるとしても、もしも、全ての自我が物語的な存在をしていると考えたり、さらには、全ての自我は物語的に生きなければならないと考えるのであれば、こうした態度は非常に危険なものをはらむと言わねばならないだろう。

26　実は、ストローソンは、日常的な自己経験の範疇では、持続性、行為者性、人格性も含めている。だが、経験の主体としての最小限の自我の範疇では、これら３つの条件は取り去られる。

参考文献

浅野　智彦(2001)『自己への物語論的接近：家族療法から社会学へ』勁草書房.

Christman, J. (2004) 'Narrative Unity as a Condition of Personhood' in *Metaphilosophy* 35, pp.695-713.

Davenport, J.J. and Rudd, A. [eds.](2001) *Kierkegaard after MacIntyre: Essays on Freedom, Narrative and Virtue*, Open Court.

Dennett, D.C. (1991) *Consciousness Explained*, Little Brown & Company.

——— (1992) 'The Self as a Center of Narrative Gravity' in *Self and Consciousness: Multiple Perspectives*, eds. by Kessel, F.S., Cole, P.M., and Johnson, D.L., Lawrence Erlbaum Associates, 1992[reprinted by Psychology Press, 2010]

Fuchs, T., Satel, H. C., and Henningsen, P. [eds.] (2010) *The Embodied Self*, Schattauer.

Gallagher, S. [ed.](2011) *The Oxford Handbook of The Self*, Oxford University Press.

Gallagher, S., and Shear, J. [eds.](1999) *Models of the Self*, Imprint Academic.

Hinchman, L.P., and Hinchman, S.K. (1997) *Memory, Identity, Community: The Idea of Narrative in the Human Sciences*, State University of New York Press.

Hutto, D.D. [ed.] (2007) *Narrative and Understanding Persons*, Cambridge University Press.

——— (2008) *Folk Psychological Narratives: The Sociocultural Basis of Understanding Reasons*, The MIT Press.

MacIntyre, A. (1981) *After Virtue*, University of Notre Dame Press, third edition[1984; 2007]（『美徳なき時代』篠崎榮訳、みすず書房、1993年）.

野口　裕二[編](2009)『ナラティヴ・アプローチ』勁草書房.

Phelan, J. (2005) 'Who's Here? Thoughts on Narrative Identity and Narrative Imperialism' in *Narrative* 13, No.3, pp.205-210.

Ricœur, P. (1983,1984,1985) *Temps et récit* TomeI-III, Le Seuil.

Rudd, A. (2007) 'In Defence of Narrative' in *European Journal of Philosophy* 17:1, pp.60-75.

Schechtman, M. (1996) *The Constitution of Selves*, Cornell University Press.

——— (2007) 'Stories, Lives, and Basic Survival: A Refinement and Defense of the Narrative View', in Hutto(2007), pp.155-178.

——— (2011) 'The Narrative Self', in Gallagher (2011), pp.394-416.

Strawson, G. (1997) 'The Self', in *Journal of Consciousness Studies* 4, pp.405-28, reprinted in Gallagher and Shear (1999), pp.1-24.

——— (1999a) 'Self, Body, and Experience', in *Proceedings of the Aristotelian Society* 73, pp.308-31, reprinted in Strawson(2008), pp.131-149.

——— (1999b) 'The Self and SESMET', in *Journal of Consciousness Studies* 6, pp.99-135, reprinted in Gallagher and Shear (1999), pp.483-518.

——— (2004) 'Against Narrativity', in *Ratio* 16, pp.428-452, reprinted in Strawson(2008), pp.189-207.

——— (2007) 'Episodic Ethics', in Hutto(2007), pp.85-115, reprinted in Strawson(2008), pp.209-231.

——— (2008) *Real Materialism and Other essays*, Oxford University Press.

——— (2009) *Selves: An Essay in Revisionary Metaphysics*, Oxford University Press.

——— (2011) 'The Minimal subject', in Gallagher (2011), pp.253-278.

Taylor, C. (1989) *Sources of the Self: The Making of the Modern Identity*, Harvard University Press.

Zahavi, D. (2007) 'Self and Other: The Limits of Narrative Understanding', in Hutto(2007), pp.179-201.

——— (2009) 'Is the Self a Social Construct?', in *Inquiry* 52, No.6, pp.551-573.

——— (2010a) 'Minimal Self and Narrative Self: A Distinction in Need of Refinement', in Fuchs, Satel and Henningsen (2010), pp.3-11.

———(2010b) 'Reply: …Even in the Absence of a Social Interaciton?' , in Fuchs, Satel and Henningsen (2010), pp.18-19.